

開かれた日本経済と経済学のために

経済学部 三邊 誠夫

ひとつのエピソード

山陽本線の小旅行は楽しいものである。先年校務で八本松に出かけることがあった。その用というのが、県内の高等学校の社会科の先生達の再教育といったようなことであった。わたくしの講義は、10時から予定されていた。

わたくしは、広島から、例の瀬戸内のみかんをデザインした「三原行き」の電車に乗った。しばらく行くと車窓の右手に朝の海が展望されてきた。山陽本線は、山の中を行くものと思っていたが、「国鉄」が「JR」になると、海が見えるサービスも始めたのかなと思っていた。ところがこの海がいつまでも見え続けているのだ。そのうちに、潜水艦が2、3隻、浮いているのが見えた。いくらなんでも、これでは自分の間違いを認めないわけにはいきまい。次の駅で引き返して八本松の会場に、着いた折には、正午前だった。「呉線回りで、八本松に来るには、時間がかかりますね」と話し出すと、みんな大笑いだった。みんな、そこは、やさしいもので、「今年の講師は、大物かも知れない」というのが聞えた。

昨年暮れに、私用で尾道に行った。山陽線の山側の席に座ったが、その風景が先年とは一変しているのに気がついた。山沿いに生えている赤松のほとんどが立ち枯れているのである。このようなことは、2、3年前にはなかったことだ。そういえば、1、2年前から、わが家の庭のシャクナゲの葉が、なぜか枯れてしまう。以前にはなかったことだ。ついながら、この木は、5、6年前に父を亡くした時に、いつもシャクにさわるおやじだったのでこの木を植えたものだ。

山の赤松が立ち枯れたり、庭のシャクナゲの葉が枯れたりするのは、この地方に降る酸性雨の仕業であるとされている。深刻な酸性雨の問題は、近年ドイツのアウトバーンや、アメリカ寄りのカナダについて報道されているが、実態は、広島地方の方が深刻であるらしい。

もう一つのエピソード

わたくしは、子供の時からアメリカ・インディアンに関心をもっている。アメリカには長年滞在したが、東部や西部の学園都市では、一見してそれと分かるようなひとには出会わなかった。

先年、テキサス州のオースチン・カレッジに滞在した際、初めてアメリカ・インディアンの町を訪問することができた。

同カレッジに、ダラス近くのシャーマンという町に、大きな病院を寄贈した W.N. ジョーンズというインディアンの酋長を調べている教授がいて、彼がある日、インディア



レッド・リバー



オクラホマ

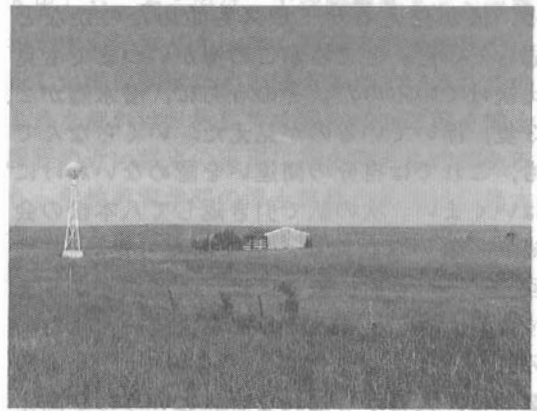
ン居留地に行こうと誘ってくれた。我々は、テキサスとオクラホマの州境を流れる有名なレッド・リバーを渡って、チョクトウ・インディアンの町、デュラントに行った。アメリカ・インディアンの人達も、混血しているので、一見してそれと分かるようなひとは少ないものだ。我々は、町の小さな図書館に行った。わたくしは、教授が、そのカウンターで働いている人達の、だれかがインディアンのひとだと小声で教えてくれるのを期待していた。ところが、教授は、大声で「この中で、アメリカ・インディアンの連中は手を上げろ」と呼びかけた。わたくしは少からずあわてた。すると、そこにいた全員の女性がにこやかに「ハイ」といって右手を上げた。

デュラントの町には、チョクトウ族の博物館がある。なぜか、開館時間が午後4時から5時までの1時間とある。普段、見物に来るひともないらしい。われわれは、そこに正午過ぎに着いたので、見物はあきらめていた。すると、博物館の館長のチョクトウ族の女性が、生涯で初めて見る日本人に気づいて、館を開けてくれた。

帰り際に、隣接したみやげ物屋で、ちょっとしたおみやげの買物をした。子供のTシャツといったものだ。すると、館長さんが、シャツの値段と同じ価値ほどの品物をただでくれる。相済まない気持ちで、少し値の張る物を買うと、また館長は、おなじほどの値段のものを

をプレゼントしてくれる。わたくしは、「プレゼントをいただくのはうれしいのですが、これらの物は、ここで売って下さい。」と頼んだ。すると彼女は、「貴方は、遠い日本から来てくれた。遠方の方をおもてなしするのは当然のことです」といって、次々に贈物をくれる。

あとで分かったことだが、アメリカ・インディアンは、元来、物品に価値を認めず、物質に恵まれている人間は、そのひとのステータスを示すものではないと考えていたのだそう。偉大な人間とは、人に恵むひとのことであって、金銭や、ものを貯め込んでいるひとは、馬鹿者と考えられていたらしい。ひとは、自分の背にしょえるほどの物があれば、十分で、それ以上の物品を欲しがらる者は、獲物を追って、移動する人間にとっては、生死にもかかわることであつたらしい。



テキサス

今日のアメリカー・インディアンには、そのような原形のイデオロギーは存在しませんが、アメリカの白人による同化と疎外の矛盾する歴史的政策的後に、依然として、彼等のうちには、「人間の必要とするものは、すべて大地のマザー・ネイチャーが必要に応じて与えてくれる」という信仰があり、折にふれてその思想が示されることもあるらしい。

さきの酸性雨の問題は、文明社会の人間が我々日本人も含めて、その生産活動、日常生活

活を通じて犯している自然環境破壊の問題であるが、この地球上には、依然として、大地のマザー・ネーチャーに生命をゆだねている人達もたくさんいるだろう。文明人でさえ、植物を死絶えさせれば（赤松は現に枯死しつつある）、生存は可能ではなくなろう。最も深刻な事態は、自然破壊に何も手出しをしていない人達に、ほとんど補償もせずに、この人達も文明人と運命を共にせねばならぬことである。

ますます暗く閉ざされる日本、日本経済、経済学

近時、我々は、「国際化」とか「開かれた大学」、「開かれた学問」という流行語をイヤになるほど聞かされる。おなじような言葉に、「経済大国」や「飽食の時代」というものもある。日本でマスコミやジャーナリズムにもはやされる人達は、このようなキャッチ・フレーズや新造語を生み出すのが好きなようである。しかし、日本の現実には、日本人にも、諸外国の人達にもますます、暗く閉ざされた、わけの分からないものになりつつある。

日本人にとって理解し難いことは、「経済大国」にもかかわらず、国民にその生活実感がない。昔に比較して、衣・食・住について、基礎的生活条件が目に見えて改善されておらず、逆に物事が悪化しているケースも多い。つまり、大都市圏では平均的サラリーマンの戸建て住宅の獲得はほとんど不可能となった。以前は年間賃金7年分ほどで購入可能な住宅（小さなマンション）が年間賃金17年分ほどに上昇した。日本人の平均寿命はのびたが、老令者や、その家族も人間の寿命ののびを祝いも喜びもあまりしていない。女性の結婚率も出産数も低下している。子供の養育もますます困難となっている。「カロー死」が国際語になっている。

さらに日本（経済）を国外から眺めると事態はますます分かりにくく、日本は国際的に閉ざされた暗いものになってくる。本年1月9日のスイス・ジュネーブにおける米国国務

長官ペーカーと、イラクの外務大臣アジズの会談を世界中の人間がかたずをのんで見守っていた。その時、日本の総理大臣は、国を空けていた。またキャンセルされたものの、湾岸戦争のデッドラインの1月15日には、総理のASEANへの外遊が決定されていた。この問題では、関係する最大の二国、米国とイラクの当初の日本による仲介の大きな期待にもかかわらず、日本は何等、政治的にも戦略的にも積極性を示さなかった。その点を諸外国から累々、指摘されても、今後も日本の自主的判断は何もない。

1990年には、世界が激動した。1989年に世界の12か国の社会主義国が5か国に減少した。ソビエト連邦が大いに变革した。これらの東欧諸国の経済構造の变革の成否に、日本の経済活動が、「大国」として大いに期待され、少なくともそのモラル・サポートが重要とされた。しかし、結果的に日本はほとんど何も彼等に手を貸していない。

日本のような無資源国には、平和な世界、自由貿易の維持が致命的に重要である。それにもかかわらず、口では自由貿易を唱え、かつ自由貿易体制で最も利益した日本が、コメの輸入自由化に対しては、「コメ神聖論」などを主張して、ガット体制の存続を危機にさ



サンフランシスコ

らす主役を演じたりしている。

困難な南北問題にあっては、わが国の基本的態度は、自力ではい上ってくる能力のある中進国とは経済関係を結ぶが、ほんとうに日本の援助を必要とする国に対して極めて冷淡である。腹を空かしている国民に毛布を山ほど贈ったりする。こんなやり方は、目を患っているひとにインキンの薬をさしてやるようなものだ。左ハンドルの国に右ハンドルの救急車を「援助」して、受取りを拒否されたことは、われわれの記憶に新しい。

日本の国内だけではあきたらずに、海外の他国に出かけて行って、よその国の州の地価を、その住民の手のとどかないところまでつり上げてしまう（ハワイ州）。一州の銀行の四分の一を買い占める（カリフォルニア州）といった行動をとる。

1985年のプラサ合意以降、対ドル為替レートが45パーセントも切り上っても、日本の対米黒字は、非常に減少しにくい。米国の土地は資産価値がきわめて乏しいにもかかわらず、それを承知で、日本企業は米国で不動産投資を続ける。自国民の勤労と、節約によって蓄積した外貨については、外国に指示されるまで、その使途も良く分からない。

消費者保護を口にはするが、80か所以上の欠陥をかくして、車を消費者に販売する車屋がいる。日本人による自然環境破壊についてはすでに指摘した。

要するに、日本、日本人の行動は、近代資本主義、ないし民主主義に照して、非常に奇妙なところが多く、日本を日本人も含めて、世界で不可解な、奇異な国にしている。

以上に述べた日本に対するイクセントリックな現象は、密接に日本の経済学に関係することである。日本の経済学は、概して、その名に値するものは、欧米の経済学と守備範囲を共にするものであるが、日本のこれ等特異現象に有効な光を与える議論は、皆無といっても良いだろう。きわめて専門特化した日本の経済学の先端分野は、

の高度に数学化された密教の中に沈潜して、日本経済の現実を完全に無視した、論理構造の正当性のみを少数の仲間内で讃美しているのが現実であろう。このような現実が日本の経済学を一層、閉ざされたものにして



開かれた日本経済と経済学のために

今日、ソビエト連邦をはじめとする社会主義圏のちょう落を自由主義、資本主義の勝利とみなす議論がある。しかし、自分の友人が優秀でないという事実は自分がそうである証明にはなるまい。社会主義圏の失敗の原因のひとつは、まずマルクス自身には、社会主義経済の分析はなかったこと、比較的単純な社会主義原則を国情の異なる複数国に適用したことなどがあげられる。

そこで、これらの変革する旧社会主義国を市場経済に移行させる経済原理として、欧米のいわば本場の資本主義よりも、むしろ戦後、成功したといわれる日本型経済、日本の経済学が、最適であるという見解がある。

しかし、日本経済には、近代資本主義の光に照して奇妙なところがある。日本の成功の結果、多少のヤッカミも含めて、日本は世界の「守銭奴」のようにならざるを得ない面がある。その結果、日本の原則を無反省に他国に押しつけると、彼等が日本的となつて、必ずしも好ましくない世界が実現することになる。

他国に日本の経済原理を紹介するにせよ、今後もそれを国内で続けるにせよ、この辺で日本の経済、経済学を再検討して、もしそれに問題点があれば、解明し、改善せねばなるまい。さもなければ、日本の経済学は決して開かれたものにはなるまい。

日本の経済学は、本質的に欧米の経済学と異なるものではない。したがって、日本の経済学に問題があれば、それは欧米の経済学、一般に、オーソドックス・エコノミックス(近代経済学)そのものに問題があることになる。この問題点には、(イ)本質的な誤りが存在する場合と(ロ)経済環境の変化によって既存の理論が妥当しなくなっている場合がある。

わたくしはオーソドックス・エコノミックスの本質的な間違いは、ひとが効用を感じないものには価値を認めないという前提にあると思う。鯨の価値は、鯨肉、鯨油、皮、骨等、人間に役立つ鯨の効用に対して値段を決める。生命のある鯨と、人間によって分解された鯨では、値は違わないが、太洋を回遊する生物としての鯨の価値はゼロであろう。人間が鯨と共生する幸せには、費用を支出する気はない。ドルフィン(イルカ)の価値は、生肉の価値だけで決められる。そこで、日本では、他に食物は豊富に存在しても、ドルフィンは捕獲されると屠殺される。かわうその価値は、その皮のみで決まる。トキの価値はトキ色の羽毛で決まる。すべての価値は、ひとの需要と供給によって決まる。その結果、かわうそは、毛皮の価値ゆえに瀬戸内海から姿を消し、トキは絶滅に貧している。人間は、かわうそが海を遊泳し、トキが群れて空を飛んでいるような状況には、効用を感じず、その維持のために、自己の財およびサービスを提供しようと思わなかったのだろう。おなじように、乗用車に

は効用を感じて金を払っても、山に生える赤松には、建材としてほどの価値しか認めない。赤松が全部死絶えると、松茸も食えなくなることには思いが及ばないのだろうか。赤松は、木材としてのみではなく、生きている松にそれ自体の価値がある。人間に効用を与えるものだけに価値を認めるのは、人間のごうまんである。

時代によって、以前には価値を認められなかったものに価値が認められるようになる事態もあろう。つぎのようなものがある。

- (1) 平和な世界
- (2) 自然環境・生態系の維持
- (3) 調和のある南北問題
- (4) 公正な人権問題
- (5) 一国における公正な所得分配
- (6) 家庭内の女性労働の評価
- (7) 国民のクオリティ・オブ・ライフ
- (8) 良質な教育
- (9) 安定した政治と、国民生活の安全
- (10) 自由貿易市場、等。(順不同)

ひとが効用を感じずるものだけに価値を認めることは、経済学の欠陥であろう。時代を通じて価値が認められる事態は、ここに例として10項目挙げたが、従来も「公共財」とか、外部経済、民主主義社会成立の大前提として、若干はとり上げられてきたが、現実にはひとがそれらに対して支出をせねばならないわけだから、正当に経済学で価値を帰属され、推計されねばならない。

日本経済についても日本の経済学についても、以上の視点について、補完されないかぎり、真の意味での開かれた学問の実現は、不可能であろう。わたくしが学部で、何人のひとがそれに気づいているか、わたくしは不安である。